

## 【研究ノート】

### 北海道民間説話の研究（その9）

### コロボックル伝説生成資料

阿 部 敏 夫

北海道民間説話の研究(その9)

## コロポックル伝説生成資料「研究ノート」

もくじ

はじめに

第1章 伝説内容

第2章 伝説の変遷

第3章 コロポックル論争

第4章 伝説事例

第5章 小人伝説

第6章 創作

おわりに

謝辞

### はじめに

コロポックルの伝説について筆者は、小松和彦、常光徹、山田奨治編『日本怪異妖怪辞典』[「東京堂出版二〇一二年刊行予定」]での解説に後述する文章をまとめた。筆者の以前にも、参考図書項目として書かれたコロポックルの解説には、『日本昔話事典』[「弘文堂一九七七年」]に浅井亨による「コロポックル」資料1があり、『北海道大百科事典』[「北海道新聞社一九八一年」]にも高橋和樹による「コロポックル」と藤本英夫による「コロポックル論争」資料2がある。また『日本伝

阿部 敏 夫

奇伝説大事典[「角川書店一九八六年」]には、合田一道による「コロポックル」資料3が掲載されている。

今回、掲載する『日本怪異妖怪辞典』は国際日本文化研究センターの「怪異・妖怪伝承データベース」に収録されている三万五千件余りの事例や古籍から、妖怪や怪異現象を項目として編纂される予定である。地域学習の参考図書として、学習教材としての利用を趣旨としていることから、筆者は執筆にあたり歴史的経緯と文学作品の紹介と、名寄市、帯広市の事例をあげた。

コロポックル(ころぼつくる)④コロポックル(ころぼつくる)コ  
ルポツクン(こるぼつくん)コロポツクル(ころぼつくる)コロポ  
クンクル(ころぼくんくる)コルポクウンクル(こるぼくうんくる)  
コロポツクカムイ(ころぼつくかむい)など

アイヌ民間説話に出てくる小人伝説。コロ(路の葉)ポツ(下)  
クル(人、神)で、路の下の人という意味で、「北海道には曾てア  
イヌと異った人民がアイヌの村落に近く穴を掘り路の葉の屋根を  
キーワード…最上徳内 村上嶋之允 坪井正五郎 宇野浩二

北海道小学郷土読本

作って住居したとの事を推知するに足る」(坪井正五郎)と言う伝説。

コロボックル伝説は、文化五年の最上徳内『渡島筆記』や寛政一二年の村上嶋之允『蝦夷島奇観』の「夷人伝へ云。コッチャカマイといふ神ありて、體四尺ばかり、手の長き神にて処々住給ふ。此神漁獵の術に通力を得給ひ土舎に住給ふけるか、夷等に魚獸の肉なとを其窓よりあたゑ賜りける。この故に其漁獵の術をまなはんと近寄れば教へ呆さすして、夷人等をきらひ給ふにや此地を去らせ給ふ。」等の記述に始まる。その後、近世末期松浦武四郎『久摺日記』、大内余庵『東蝦夷夜話』そして、近代はジョン・ミルン、ジョン・パチエラーなどが言及している。明治一七年の渡瀬莊三郎の第二回人類学会の報告を白井光太郎が批判したことがきっかけにしてコロボックル論争が起る。坪井正五郎・白井光太郎・小金井良精・鳥居龍藏・河野常吉・足立文太郎そしてマンロー、モースやE・ベルツなど多くの研究者がコロボックル論争に参加した。この論争は考古学調査などの研究の進展で、多くの研究者はアイヌ＝コロボックル説を支持した。この論争もコロボックル説を主張する坪井正五郎の大正二年の死去で終わる。また、宇野浩二『落の下の神様』、宮本百合子『風に乗って来るコロボックル』などの文学作品も創作された。

【事例】①「北海道名寄市」 落の葉かげに六〇人、とか三〇人、一〇人、八人、五〜六人といふに、共通しているのは落の葉かげとか下に生活したということ、姿を見せないで食物などを持ってきてくれたということ、姿をみられてから、何処かへ去ってしまったなどということである。(大河上州「ナヨロの伝説」名寄市立図書館一九六四) ②「北海道帯広市」 ずっとむかしはシベツ(十勝川)に沿って、アイヌのほかにコロボクウンクル(ふきのしたに住む者)も住

## (二)

んでいたと。コロボクウンクルは背が低くて、ふきの下に五人も六人もかたまつて住んでるくらい、ちっちゃいものだったそう。ごはんを作ると必ず部落の人の所へ持ってきたそうで、何でも人にやるのが好きだったそう。自分たちがごちそう作ると、それをイタンキ(お椀)いっぱい盛って、アイヌのところへ来てアパオロッペ(戸口のかげご)の下から手を出してイタンキをよこしたそう。アイヌがそれを受け取って、押しただくと、コロボクウンクルは喜んでいと。アイヌコタンに一人者のウエンクル(悪い奴)がいて、ある日コロボクウンクルがアパオロッペの下からイタンキにごちそうをいれてよこしたとき、そのコロボクウンクルカマイの手首を押え、とうとう家の中へ引っぱっていったと。やつと引きいれてそのコロボクウンクルカマイを見たら、まっぱだかの小さな女であつたと。その女はそれから泣き泣き帰って行つたと。そうしたらコロボクウンクルの親方が怒つて来た。それまではこの辺はシアンルコタンという名前の立派なコタンだったけれど、コロボクウンクルたちがイケスイ(激怒)してレブンコタン(海の向うの国)に引き上げるときに、コロボクウンクルの親方がこう言つたと。「このコタンはシアンルコタンであつたが、これからはこのコタンのものは、ネブ、チー(何でもやる)」コロボクウンクルの親方が怒つて、「このコタンをトカプチー(枯れてしまふ)って名前つけるから」と言つてどこかへ行ってしまったと。それからこのコタンをトカプチコタンと呼ぶようになったと。これがそのウチャシクマ(お話)だ。(語り手三浦ノブ、浅井亨「アイヌの昔話」日本放送出版協会昭和四七) (阿部敏夫)

【参考文献】吉岡郁夫・小出龍郎「コロボックル説の成立と終焉Ⅰ〜Ⅳ」、『愛知学院大学教養部紀要』一九九七、八、坪井正五郎「石器時代人民に關す

資料 1 『日本昔話事典』  
[弘文堂1977年]  
浅井亨

コロボックル ㊦ Korpokkur. アイヌ語 kor-pok-un-kur (ふきの下に住んでるお方) の縮約形と考えられる。北海道の原野に生えている「オニブキ」は、1枚の葉がゆうに傘の代わりをするくらいに大きい、コロボックルという名は、その下に数人入るくらいだったからとも、住居の屋根をふきの葉でふいていたからともいう。コロボックルカムイは背が低く、大変に気立てのよい連中で裸で生活していたとか、アイヌの近くに集落を作っていたとか、アイヌに入墨を教えたとかいわれる。昔アイヌの中に悪ふざけをした者がいたので、怒ったコロボックルたちは連れだって、ある日突然に北の海のかたへ姿を消したという。また北海道中央部には、やはりコロボックルカムイと呼ばれる、背が低く、智恵と力の優れた不死身の勇者がいて、人々の難儀を助けたという話がある。その子孫と呼ばれる家系があって、代々背が低かったという。このアイヌ民話の中のコロボックルと呼ばれる種族とオホーツク海沿岸に認められる遺跡文化とを関係づけようとする人もある。しかしコロボックル人種が実在した証左はなく、その存在を否定的に考える人が多い。コロボックルの民話が流布していない地方では、所によりキムンアイヌ(山に住む人)と呼ばれる背の低い、いたづら好きだが人々を助けてくれる連中の話もある。このキムンアイヌを怒らせると大変怒らしいめにあうとされて、畏敬されている。キムンアイヌについては、巨人であるとか、アイヌより大きいとか、一目で人を喰うとかいう話もあって、コロボックルのように共通したイメージはない。コロボックルをバチラー J. Batchelor は corpok (真下) ととり、冬期間穴居する人々 pit-dweller (穴居人) と呼び、土器を伴う堅穴遺跡は古代のアイヌのものと考えた。明治の中頃、坪井正五郎が、コロボックルはエスキモーに類似した人種で、日本列島の石器時代人で、アイヌ以前の北海道の住民であると唱え、小金井良精、鳥居龍蔵らとの間にコロボックル論争を起こした。

【参】坪井正五郎「石器時代人民に関するアイヌ口碑の総括」(『東洋学芸雑誌』11) (浅井 亨)

資料 2 『北海道大百科事典』[北海道新聞社1981年]  
高橋和樹 藤本英夫

コロボックル アイヌの伝説に登場する小人。一般に「露の葉の下の人」と訳され、バチラーは単に「下に住む人」の意味という。小人伝説は北海道、南千島、樺太に広く流布しており、コロボックルのほかトイチセウンクル、トイチセコッチャカムイ、トンチなどとも呼ばれている。いずれも堅穴に住む人の意味。昔コロボックルという背丈が小さく、敏捷で漁猟の技術にすぐれた原住民がおり、屋根を蔭の葉で葺いた堅穴に住んでいた。情が深く、シカでも魚でも獲った獲物はアイヌに分け与え、時には物品を交換したが、姿を見せることを嫌い、食物をアイヌに贈るにも夜密かに窓や入り口から差し入れる。ある時アイヌの若者がその容貌を見ようと待機、食物を差し入れる手をつかんで屋内に引き込んだところ、美しい婦人で手の甲に入れ墨をしていた。この無作法を怒ったコロボックルは突然姿をくらまし、以後消息が知れない。アイヌ婦人の入れ墨はコロボックルに倣ったものであり、そこそこに窪みの残る堅穴は彼らの住居跡で、出土する土器や石器も彼らの使用したものだという。伝承された地域によって伝説の内容に異同がある。漁業をしないで常にアイヌに食料を乞い求めたとも、もともと入れ墨はアイヌの風習で、戦争で捕えたコロボックル婦人を奪還されないよう入れ墨を施したのだとも伝えられている。明治時代に坪井正五郎らがこの伝説に依拠して日本の石器時代住民がコロボックルであると唱え、結局は否定されたが、当時の人類学会ではコロボックルの存在をめぐって議論が沸騰した。→コロボックル論争 (高橋 和樹)

コロボックル論争 コロボックルろんそう 日本石器時代人の由来について、明治の中期から末期にかけて、坪井正五郎の唱えたコロボックル説をめぐって、主として『人類学報告』(のち、『東京人類学報告』『東京人類学雑誌』『人類学雑誌』と改題) 誌上でたたかわれた論争をいう。コロボックルは、アイヌに伝えられる小人伝説の主人公である。坪井のこの学説のきっかけは、1886年(明治19)、渡瀬庄三郎が『人類学報告』創刊号に発表した小論文で、札幌近傍にみられる堅穴住居跡は、アイヌの前のコロボックルが住んだ跡である、といったことによる。坪井は、この渡瀬説を支持しながらも、コロボックルという言葉を使わないで、「此人種はアイノ前の土人」と云ふよりは寧ろアイノならざる土人」という慎重な言いまわしの演説内容を同誌9号に発表した。ところが、これに対して、坪井とは同学の同志である白井光太郎がM. Sなる匿名で、「コロボックル果シテ北海道に住ミシヤ」と題して、そう考えるのは「実ニ無稽ノ憶説」と同誌11号で反論、続けて坪井が同誌12号で、「コロボックル北海道に住みなるべし」と再反論した。以後、小金井良精、佐藤伝蔵、鳥居龍蔵、浜田耕作、喜田貞吉ら多くの研究者が参加した。この論争は、1913年(大正2)、坪井正五郎がロシアで客死してコロボックル説が衰えるまで続くが、この論争を通じて、日本人類学、民族学、考古学は飛躍的に発展する。この論争以前には、明治の初期、シーボルトやミルンによる日本石器時代人アイヌ説と、モースによるブレ(前)・アイヌ説があったが、系譜的には、坪井のコロボックル説はブレ・アイヌ説につながる。この論争過程で、河野常吉ら北海道在住の研究者は、終始アイヌ説であった。→コロボックル 坪井正五郎 一渡瀬庄三郎 →アイヌ研究史 (藤本 英夫)

資料3

乾 克巳他4名編  
『日本伝奇伝説大事典』  
発行 角川書店  
昭和61年10月10日

コロボックル

アイヌの伝承に出てくる小人。アイヌ語の訳は「路の葉・下・そこにいる・人」で、「路の葉の下の人」の意。北海道はじめ、南千島、樺太にも流布されている。コロボックルのほか、トイチセウンクル、トイセコツチャカムイ、トンチなどともよび、土で作った家——堅穴——に住む人の意味もある。

日本人種論の初期に登場するコロボックルについて、はじめて記述したのが慶長十

八年（一六三三）来日し、平戸に商館を開いたイギリス人、J・セーリス。F・ペーコンに献じた日本渡航記の中で、「蝦夷地の北方に非常に小さい小人が住んでいる」と書いている。これによると、北海道にはコロボックルといって、敏捷で漁狩の技術にすぐれた背丈の小さい人たちが住んでいた。そこへアイヌがやってきた。コロボックルはアイヌに鹿や魚を分けてやったが、姿を見せるのをいやがった。アイヌの男たちは色白で美しいコロボックルの女をさらったので、コロボックルはある夜、遠い所へ去っていった。アイヌの女が口元に入墨をするようになったのは、コロボックルの女を真似たものである。この伝承は北海道の最北端、稚内市宗谷に残っているが、住居といわれる堅穴跡はわからない。

南端の上ノ国町小砂子の「ちいさこ伝説」はいくつかの記録にみえる。幕府の蝦夷巡検使、細井佐治右衛門一行が記した『蝦夷記』（宝永七年）には、「昔、此所へ小人島の者共参り候由、土を取り、又は草を、人数百人ばかりにて抜き取り帰り申候。所の名をば小き子が島と申候。右板にてこしらへたるものはチイサゴガバと申すものにて（中略）是を黒焼にいたし、用ひ申せば、をこりの病によく、去り候由、又ひぜんかさに付て早速平癒すよし申候」とあり、古川古松軒も『東遊雜記』（天明八年）に浦浜の風情を書き、菅江真澄また翌寛政元年（一七九九）、小砂子で老婆の語る話を『蝦夷喧辞弁』に詳しく書きとめている。菅江真澄の内容は、三尺くらいの男たちがたくさん小さな舟に乗って、磯山の土を取りきたので、村人たちは驚き、騒ぎ、舟の水跡をたよりに舟を漕いで追

かけたが、沖の荒潮にへだてられ、小人たちはいずれとも知れずかき消すように波と潮にまぎれていった。海に向こうに小人の国があり、そこから流れてくるアバを焼いて炭にし、火やけや湯やけのただれにつける薬にしている、というもので、コロボックルと同一視できないものの、北海道に残る小人伝説としてとめておく。

コロボックルについて日本人が最初に記したものは寛政十二年（一八〇〇）より書き始めた村上嶋之丞の『蝦夷島奇観』で、ノックマップ酋長シヨコの話として、小さな神が穴居に住み、種々の宝器を掘り出すことがある、といっている。このほか同年代に書かれた『東夷周覽』『渡島筆記』にもコロボックルと穴居跡の石器、土器をからめた部分が見られる。

松浦武四郎は『久摺日誌』（安政五年）の中で「其辺に一丈五六尺位小人の家跡つゝの穴多し、コロコクンクル小人の家跡なり」と惣て此辺土人の言伝へに昔は小人が住して云事を伝ふ、此穴恐らくは小人ならで古人の穴居跡かと思ふ」とコロボックル居住説を否定したが、大内余庵は『東蝦夷夜話』（文久元年）に、「矮人の立去りてより後も夷人は穴居にてありけん」とコロボックルが住んだのち、アイヌが住んだとしている。

このように、日本人種論におけるコロボックルの存在は、堅穴とアイヌの伝承をもとにしているが、明治十一年外国人学者らがやってきて、「古代の日本の住人が現代の日本人につながるものではない」としながらも、コロボックルの実在性やコロボックル・アイヌ説を相次いで発表、この二つの意見は後のコロボックル論争につなが

ていく。

論争のきっかけは渡瀬莊三郎が明治十九年に「人類学会報告」に発表した「札幌近傍ピットとその他古跡のこと」で「是二住ヒシハ恐ラクアイヌノ前ノ土人即チコピト又ハコロボックルト称フルモノナル可シ」と述べたのを受けて坪井正五郎が人類学会の第二年会演説で慎重な言いまわしながら、渡瀬説を支持。これに対し坪井の同志である白井光太郎は同誌十一号に匿名で「コロボックル果シテ北海道ニ住ミシヤ」と題し「実ニ無稽ノ憶説」と論陣を張る。以来、両者は激しく論争を繰り返し、小井良精や佐藤部なども加わりコロボックル論に反対、やがて主役は坪井対小井に変わっていき、孤立化したコロボックル論の坪井が大正二年五月、ロシアで客死するまでそれは続いた。

（合田一道）  
参考文献 藤本英夫『アイヌ学への歩み』（北海道出版企画センター 昭58）

るアイヌ口碑の総括」、『東洋学芸雑誌』第一四八号明二七

本論では、以上の解説文の根拠となった資料を紹介し、コロポックル伝説の生成の状況を補足するものである。また『日本昔話事典』『北海道大百科事典』『日本伝奇伝説大事典』以降の研究についても紹介したい。なお「コロポックル」の表記については資料によつて様々にあるが、引用文では原文のままとし、解説本文では「コロポックル」とする。

## 第1章 伝説内容

コロポックルについて最初に記録されたのは、西洋人では『ジョン・セーリス書簡』(一六一三年)、日本側では『勢州船北海漂着記』(一六六一年)がある。

前者には「この蝦夷で北方に住んでいる人は、非常に小さくて侏儒のようである」とあり、後者は

蝦夷人物語申候は、小人島より蝦夷へ度々土を盗みに参り候おとし候得ば、其儘隠れ、船共に見え不申候由、蝦夷より小人島迄船百里も御座候由、右之土を盗みて鍋にいたし候とある。

これらの記録には「コロポックル」の名称はないものの、蝦夷地とは別の場所にいる「小人」であることが伝聞情報として記録されている。

「コロポックル」の名前や、アイヌ民族との関係性が記録されるのは、ロシアの南下政策に対抗するため、蝦夷地全域が幕府の直轄地となった文化四(一八〇七)年前後になる。

幕府の関係者のなかで、蝦夷地での調査経験が長い最上徳内は、文化五(一八〇八)年に著した『渡島筆記』に「コロブクングル」の話を次のように記述している。なお最上の記録には①名前の語源、③アイヌ民族から魚を貰う、③アイヌ民族の刺青の由来となる、④落の葉の下にいる、⑤穴居の遺構や土器の使用、というその後の「コロポックル」伝説の基本情報が入っているが、②は後に、与える側に変化し、④は「戦闘をなすとき介胃して」という前置きが抜ける。また、この当時、すでに「コロポックル」を「小人」とする和人がいたようであるが、最上はそれを「よくよく尋ねしに、ふきの葉の陰に六人も七人もかくれたりといふなれば、常の人にてはさは有まじ、小人ならむとて、これをききし(に)松前や南部、津軽より来る鄙人か臆よりいひ出したる詞なるよし」と、アイヌからの伝聞ではなく、「落の下」という表現による臆測であることを記している。

又コロブクングルといふものあり。是も古しへの人にして、時世いつなることを失ふ。コロブクングル子細に唱ふれば、コロボツコルウンクルなり。又ボツ実はボキなり、コロとはふきの葉なり。ボキ此にボツと略呼す。ボキは下といふことなり。コルは持なり、ウンは居也、住也。グルは人といふ義なり。則ふきの葉の下にその茎を持て居る人といへる。東辺にては是を、トキチセウンクルと呼。トキは土地、チセは宅なり。ウンクル前に同し。これ土室に住む人といふことなり。婦人の手と吻唇とに黥する(は)此コロブクングルに始る。相伝ふ。声あり、形を見ず。夷人が漁獵をすればとく前に行てとり、或は捕ておきたる魚を盗去り、又家に来て魚を乞(ふ)。与へざればあだをなす。氣力をたのむものあり。其状を見んと欲(す)。偶その家に来りて乞(ふ)。窓より魚を出しとらむとする手

を握りて放たず。遂に内に引入たり。これを見れば美婦人なり。三日食を与へず死したり。其手及臂吻黥有て美なりしかは、女子みな学びしより、終に舉島にあまねし。吻黥は男子の鬚の状にす。其色濃く真黒なるかごときを好とす。両手の文は交の井形にして、その間に花葉の状を雜ゆ。是亦文密にして色濃からんことをもとむ。只臂の黥のために数日食ことあたはず、たまたま死にいたるものあり。此コロブクングルが事も取にたらざる説なれども、かゝる殊俗の者一旦来捩りて風をなしたる様には思はるゝなり。又コロブクングル魚を乞にあらず、人に魚を与へしともいふ。いつれにもコロブクングル一人の名にはあらず。其種類をさして呼に似たり。さまざまにゑぞをなやまし、戦闘をなすとき介冑して六、七人ふきの葉の下に伏したり、などかたり伝ふ。これ小にしてしかるや。幻にしてさるわざをせしやはしらず。又彼が宅跡とて、凡方二歩斗なる地を穿、今見たる所の深さは二、三尺許、四辺土を封じ埒の状をなしたるあと所々にあり。後いずちへか行しあとなし。其宅跡の辺より小壺を掘出すことまゝあり。夷人も希にこれを得れば殊に秘藏することなり。少なるものは二合ほどを入べし。前にいふ喜右衛門もコタンベツといふ所の辺にて、川の岡を嚙たるところより一つとり得て、しかも全（く）して損せず。トママキの小使シトクタといふゑぞもとよりそれに同じき壺二を蔵し、あはすれば三になるまゝに賜れかしとむるにまかせやたり。其壺中に薪の焼きたる炭と砂と入て有し。いく百年の物なるや、千年なるやしらざれども、炭は朽ざるものとて語し。此等の説をいふもの、コロブクングルか事をこ人こ人といへり。もしゑぞがコヒトといはゞ穴居の跡といひ、胡人ならんもはかりがたきまゝ、よくよく尋ねしに、ふきの葉の陰に六人も七人もかくれたりといふなれば、常の人にてはさは有まじ、小

人ならむとて、これをききし（に）松前や南部、津軽より来る鄙人か臆よりいひ出したる詞なるよし。しかれば胡人の事には引附がたしいへども、穴居の跡といひ、壺といひ、事はよく近似すといふべし。

『日本庶民生活史料集成 第4巻 探検・紀行・地誌 北辺篇』「三一書房一九六九年」524～525頁、文中の（一）は同書での補足（傍線は筆者）

寛政十年、幕府の蝦夷地調査において、近藤重蔵に従い国後・択捉へと渡った村上嶋之丞（秦檜磨）は、最上徳内からアイヌ民族の風俗について学び、解説を絵とともに著した。伊勢の杜家の出身であった村上は、国学の素養があり、記録のなかでも文献資料により独自の考察をしている。村上は石器や遺構から「コツチャカモイ」を考察しており、体格については四尺（約1m20cm）と小柄で「手の長き神」であると、『日本書紀 卷三』「神武天皇己未年春二月条」に記述された「土蜘蛛」のような姿をイメージしている。

#### 「女夷文手図」十四

##### 女夷文手説

夷人博へ云。古、コツチャカモイといふ神ありて、體四尺はかり、手の長き神にて處々に住給ふ。此神漁獵の術に通力を得給ひ土舎（トエチセ）に住給ふけるか、夷等に魚獸の肉などを其意よりあたゑ賜りける。この故に其漁獵の術をまなはんと近寄れば教へ呆さすして、夷人等をきらひ給ふにや此地を去らせ給ふ。

此神の夫人ワきて美色なりしか手に色々の文理あり。それ故に彼神の徳を慕ひ女夷等其状をうつし今に至るまで文身すと古老の博説

なり。此神住給ひたる旧址處々にあり、其土中より陶器の碎けたる又ハ玉の類ひ種々の寶物を掘出す事ありとノツカマツ地名の酋長シヨンゴ語りき。

日本紀神武天皇己未年二月条下曰、高尾張邑有土蜘蛛。其爲人也身短而手足長。與侏儒相類。下略 往昔かゝる者の住しにや、いつれ其傳聞のふるき據あるへし。近年魯齋亜人來り寓せし頃、土中を掘入れて家を造れり。彼國はこの島に近き故に、古も渡りて住居せしをかく誤り博ふる歟。今ニても五色の色とりさへしらざる夷人なれハ、況やそのむかし文をなすへきワさはよもしるましき事なり。此神の夫人ミな手に文理をなせしを珍しく思ひて移し習ひたるなるへし。又コツチャカモイの旧址を掘れば黒く通明なる玉の破れたる、又は石弩、雷斧等の類、其外後世辨別しかたき物種々出る事あり。シヤモコタン地名の酋長ノチクサなる者いへらく、コツチャカモイの頃は刀子なけれハ、此黒玉アジをもつて萬の物を裁断せし事なりと

秦穩磨筆(研究解説 佐々木利和 谷澤尚一)『蝦夷島奇觀』(雄峰社 一九八二年)

文化二(一八〇五)年に蝦夷地の巡視に赴いた幕吏新井精齋は、「コルボルグルカモイ」について「侏儒」の観点から、その記録に次の考察を残している。なお文中に小文字で表記された注記は「」内に記した。

其むかし 蝦夷地にコルボルグルカモイといふ者(欽冬下黨人と云事なり)有是もの侏儒なりしか欽冬の葉の下に三人つ、かゝり居るなれむ夷人いふなり(上古の諺にも三人同心せるものをさして黨

(グル)也といふ義におなし黨をなすといふ事なり)それ等が棲める所にて夷人ものを乞ひし時彼ホルグル窓よりものをあたへけるか其手に入墨有りしをまねたるか今に遺れるかなりといふ又コツボルグル其後北に移りて今は蝦夷地にその種 なし又一名トイコキコモイ(穴居の人といふ事なり)又クルムセといふ然れども是は加模西葛杜加の別名にしてウルツフに近きと思ひあやまりて夷人の斯いふ事之勿論侏儒國とハ我國をさして唐山のむかしに称しけると唐書東夷列伝の内にあれども是は我國を指て侏儒と云ひし理曾てなし疑くは李唐の頃彼コルボルグル等か蝦夷地に在しを挿て座上の臆断ならんか其後の書に倭奴國と有是は彼異域の風にして自國を中華中國として四方の國を蛮夷のごとく賤しむる事なれば我國の事をおとして書けるとおもへり侏儒の名におゐてはる所なし

東密元楨(新井精齋)『東海參譚』(一八〇六年)

幕末期の蝦夷地各地域を探検した松浦武四郎は多くの記録・報告書を著しているが、「コロボツクル」については「小人」の話として安政五(一八五八)年の『久摺日誌』『十勝日誌』に記録されている。松浦の記録は説話ではなく、次の引用に見られるように、穴居の遺構、土器・石器を使用していた民族として、現地のアイヌから採集している。

其辺に一丈五六尺位つゝの穴多し、コロコクンクルの家跡なりと、惣て此辺土人の言伝へに昔は小人が住して云事を伝ふ、

『久摺日誌』(刊本 一八六一年)

土人は小人の跡と云えり。リフンライ(十勝川の左岸)また此所

より雷斧石土器の欠等出るよし、余も二枚も得たり、土器も今は至つて稀なりと、言傳に往昔鉄器なき時はこの地鍋も土にて作り用ゐ、野菜類魚獸等の肉を切るにこの雷斧を用ひ、家財を作るには石きり石のみ等の物あり、人と打ち合、た、き合等する時はへきれきがんまたは石づち等いふ有

『十勝日誌』「刊本 一八六一年」

なお近世の文献史料から「コロボツクル」を考察した平山裕人は『アイヌ史を見つめて』「北海道出版企画センター 一九九六年」で、伝説・説話になるまえの「コロボツクル」の記述に注目している。平山は「コロボツクル」は、先住民として実在した人々と考察している。（『文献史料からコロボツクル伝承を見る』111～113頁参照）

## 第二章 伝説の変遷

明治に入り、伝道のため、アイヌ文化の研究に努めたジョン・パチェラーは、明治十七年の著書『蝦夷今昔物語』で「コロボツクル」について、①名前の語源、②雨の日には路の下に立つ、③穴居跡、石器の使用、④「土蜘蛛」との関連性など、近世の文献を踏まえて次のようにまとめている。

なお、ここでは「コロボツクル」がいなくなった理由をアイヌ民族との戦いの結果としている。

### 第三 舊土人事蹟古傳説

堵テ、アイヌ人ピラトリヲ放レテ四方ニ散居スル際短人（コヒト）ニ逢ヒリ、此等ノ人種ハ、地中ニ圓形（マルキ）ノ穴ヲ穿チ、上ニ

（八）

又圓形ノ屋ヲ結ヒ、其屋上ニ木皮ヲ覆ヒ、土ヲ塗り、雨露ヲ防キ、室中ニ、爐數箇ヲ設ケ、其側ニ寢食シ、獸皮ヲ衣トス、アイヌ人ハ、之レヲ呼ンデ、コロボツクル、ト云フ其意ハ穴居スル人民ト云フ義ナリ、ト此ノ義如何ント問フニ、コロ、ト、云フハ、持ツ、ト云フ義、ボツク、ト云フハ、下ト云フ義、クルト云フハ人ト云フ義ナリ、故ニ、穴居スル、人ヲ指テ、コロボツクル、ト呼ヘリト併シ、土人ノ語學ニ由レハ、皆連當セス、誤リナリ、如何トナレハ、曾テ此ノ事ヲ精ク土人ニ問フニ、ボツク、又、クル、モ、上ニ述ル如キ意味無キアラサレドモ、此ノ、コロト、云フ辭ハ、持ツ、ト云フ意アルモ、此ノ、コロボツクルノ、コロハ、意義ヲ異ニス、持ツ、ト云フ意アル、コロ、ハ動詞ナリ、土人ノ語學ニ由レハ動詞ハ實名詞ノ前ニ立ツ能ハス、故ニ余又之レヲ、他土人ニ訂セハ、コロボツクル、ノコロ、ハ即チ、コロニ、ノ略語 ニシテコロニ、ハ歎冬ナリ之レ能ク、語學ニ適セリ、故ニコロボツクル、ノ意ハ即チ歎冬（フキ）ノ下ニ居ル人ト云フ義ナリ、然リ、而ノ、土人何ヲ以テ、彼レニ此ノ名稱ヲ、付シタルト問フニ、彼ノコロボツクル、ハ侏儒（タケヒクキ人）ニシテ背ノ丈キニ尺乃至三尺許ナリ、若シ外行シ雨ニ逢トキハ、歎冬ノ葉下ニ立チ、雨ヲ避ク、故ニ、アイヌ人之レヲ稱シ、コロボツクルト云ヒリト、此ノ人民ハ、陶器（ヤキモノ）ヲ造リ、又石ヲ尖ラシ矢ノ根ヲ製ス、今ニ至リ北海道中、彼レカ住居セシ、圓形ノ穴、及其中ニ 彼ノ、矢ノ根、或ハ、陶器等、深山朽木腐草ノ下ヨリ往々穿リ出スコトアリキ、余モ又此函館ニ於テ、彼ノ矢ノ根、陶器ノ類ヲ見シコトアリ、古昔、此ノコロボツクル、頗ル衆多ナリ、然レドモ曾テ、屢々、アイヌ人ト戦ヒ、遂ニ殄滅ニ歸セリ、四五百年以前は、アイヌ人モ此ノ、コロボツクル、ノ用ヒシ石ヲ尖ラシタル矢ノ根ヲ用ヒタレドモ、彼ノ毒ヲ着クルニ、石

ヨリハ竹ノ便ナルヲ以テ、漸次竹ニ改良シタリト、又、アル、アイヌ人ノ古傳説ニ由レハ、昔時ノ、アイヌ人ハ此ノ、コロポックル、ト同ク圓形ノ穴ヲ穿チ、同形ニ家屋ヲ造リタレドモ、後世本邦人ト交接シ、漸衆開化シテ、彼レヲ廢シ、此レニ倣ヘリト、此ノ事實ヲ以テ、他土人ニ訂セハ、或ハ虚説ナリトス、余亦之レヲ信スル能ハス、余曾テ、日本古事記ヲ見ルニ、神武天皇ノ時、浪花ニ於テ蝦夷ノ土蜘蛛ヲ殺スト、夫レ此土蜘蛛トハ、此ノ、コロポックル、ナルヤ、又アイヌ人ナリヤ、其如何ヲ知ル能ス、然レドモ、其字義ヲ考フレハ、果シテ穴居ノ意アリト知ル、

バチロル『蝦夷今昔物語』「一八八四年」10～13頁(傍線は筆者)

さらにバチエラーは、大正十四年の『アイヌ人とその説話』にも「コロポックル」について書いているが、ここでは「アイヌ人の昔噺」として、説話化された「コロポックル」の話を紹介している。

さてコロポックルのことであるが、後世に至つてアイヌはコロポック「下に」にを間違つて解し、コロコニ即ち「落」に思ひ違ひして了つた。その結果、恰も彼のアフリカ大陸の蔭暗き森林を徘徊する矮小人種のように、この植物の葉の下に住んだ一寸法師と臆断するに至つたらしい。日本人はこうした物語から、今は死に絶へてないが矮小人種があつたらしく思つて、コビトと云ふてゐる。素よりこの所見を支へるに足る。こうした人種の人骨や遺物等、何一つ證據となるべきものがない。況んやアイヌ語のほかにコビトの言葉など聞いたことはないのである。唯だこの臆断説に唯一の權威とも云ふべきものは、今引用するこれらの人種に関するアイヌ人の昔噺である。

それは、「大石、穴の中に棲息した一つの民族が私共の間に住んでゐた。それはそれは小さい人々で、十人一團となつて一枚の露の葉を隠れ家とすることが出来た。彼等が鯨取りに出掛けるとき、笹の葉を縫ひ合せ小舟を作り、いつでも魚を捕るに釣針を用ゐたが、一尾の鯨が針にかゝると、五艘の小舟の人々が力を合せて上げた時には十艘の舟の人々が総掛りで陸に引き揚げねばならなかつた。そうして大勢かゝつて彼等の根棒や槍で殺したものだ。處が、これは又た不思議と思はるゝことは、この小さいが神様のような人々は、大きい鯨さへ殺したものだそう。これで見ると、コロポックは紳さま達であつたに相違なからう」と。

北海道のある地方では露が非常によく成長する。私が憶へてゐる最も大きいものは、その葉直径四尺一寸、莖の長さは五尺以上のものもあつた。莖は鹽で味をつけて食用とするが、樽や瓶の栓に使つても悪くない。日本人はこの植物をフキと云ひ、矢張食用に供する。

ジョン・バチエラー『アイヌ人とその説話』〔富貴堂書房一九二五年〕14～15頁

### 第三章 コロポックル論争

「コロポックル」は、説話として生成された他に、遺構・遺物の使用者として、アイヌ以前の先住民としての考察がなされた。

先住民としての考察は、草創期の考古学・人類学界での論争として發展するが、その発端は、白井光太郎の論文への反論として明治二十二年二月十三日に發表された坪井正五郎による「コロポックル北海道に住みしなるべし」になる。

坪井正五郎の考察については、論争の中で幾編もの反論としての論

文が書かれているが、その意見の集約について、「石器時代人民に関するアイヌ口碑の総括」『東洋学芸雑誌』から次に引用するように、路の下という記述から「此人民の身體が小さくなければ成らぬと考へるのは誤り」とし、伝説から考古学上の資料に脱却させる。

先づ第一に石器時代人民のの名の名稱の事から述べませう。北港道諸地方に石器時代の跡を遺した古代の人民は自ら何と稱て居たか知る事は出来ませんがアイヌは之を呼ぶに様々の名を以てします。

或所では此人民を「コロボクウングル」と申します。此名はアイヌ語で路の下の人と云ふ意。此人民は常に蒔の葉の下に隠れたから斯く呼ぶとの事（い）。北港道の路は秋田路の様に大きいもの故、此名を聞いて直に此人民の身體が小さくなければ成らぬと考へるのは誤りでござります。又或所では此人民を「コロボクウングル」と申します。

意味ハ前と同じでござりますが、此名を彼等に興へた譯は單に路の葉の下に立つと云ふ點に在るので、隠れると云ふ事柄は含んで居られないのでござり（か、よ）。又或所では彼等に此名を興へた所以は路の葉を以て屋根を葺くのに在ると申します（わ）。又彼等を「コロボングクル」ト呼ぶ所が有る。是も路の葉にて屋根を作るのに由るとの事（ろ）。又「コロボクングル」呼ぶ所も有る。是は路の葉の下に隠れるのに由つての稱へで有るとの事（は）。

「コロボックル」なる名稱を用ゐる所も有る。是は路の葉の下に立つと云ふ事から出た名で有るとの事（に、ほ）。又常に路の葉の下に居ると云ふ事から出たとも申します（ぬ）。「コロボクカモイ」（へ、ち）或は「コロボクカモイ」（と、る）と云ふのは路の下の神の意で、矢張り路の葉の下に立つと云ふ事から出た名稱。「コロボ

ク」と云ふのは單に路の下と云ふ意では有るが固より路の下の人を指すので此名の據は雨降りに路の葉の下に居ると云ふのに在るとの事（り）。又路の葉を以て屋根を葺いたのに由つて斯く名づくとも云ふ（を）。「トイチセコッコロカモイ」とは土の家を持つ神の意。即ち穴居人と云ふ事（た、れ）。「トイチセクル」とは土の家の人の意。同じく穴居人と云ふ事（ぬ）。「トンチンカモイ」と云ふは意詳ならず（た、り）。「チセコッチヤケカモイ」とは家の傍の神の意。即ちアイヌに接近して住まふ人と云ふ事（つ）。斯く種々の名稱が同一人民に與へて有るのは一見甚だ疑ハしい様ではござりますが、元來自稱では無く他から付けた綽號でござりますから、數の多いのも敢て怪むには足りません。小異を捨て、名稱の據を大別すれば、第一に路の葉の下に居ると云ふ事（い、ろ、は、に、ほ、へ、と、ち、り、ぬ、る、を、わ、か、よ）、第二に穴居すると云ふ事（ぬ、た、れ）、第三にアイヌに接近して住まふと云ふ事（つ）と成ります。路の下と云ふ事から明かに路の葉を以て葺いた屋根の下と解する所は三ヶ所（ろ、を、わ）、でござりますが、恐らく此稱への眞意は総て其通りでござりませう。此所に穴居と申すのは地面を掘り凹めた穴の事でござりますから、其覆ひは能く目立つたに相違ござりません。既に穴が住民名稱の據と成るならば、其屋根を葺く材料も亦同じく住民名稱の據と成る可きは誠に自然の事でござります。以上名稱のみに由つて考へても北港道には曾てアイヌと異つた人民がアイヌの村落に近く穴を掘り路の葉の屋根を作つて住居したとの事を推知するに足ると思ひます。

前に列挙しました十二の名稱は総て同一人民を指すのでござります。すかち、何れを以て通稱とするも差支へはござりませんが、其中で「コロボックル」と申すのが最も呼び易いと思ひますから、私は之

を撰ぶ事と致します。

坪井正五郎「石器時代人民に関するアイヌ口碑の総括」『東洋学芸雑誌』  
第一四八号「東洋学芸社」一八九四年一月 30～31頁

また、坪井は明治二十九（一八九六）年の『風俗画報』に「コロボツクル風俗考」を十回連載しており、その挿絵には、土偶を参考にした服飾や髪形、土器・石器を使った生活様式とともに、落の葉で覆った竪穴住居の復元図を作製し、石版による配布資料も出版している。（図版 1）

坪井による考古学、人類学上での論争は多くの学者を巻き込み長く続くが、大正十三（一九二四）年に『アイヌ神話』を出版した中田千畝は、学会での論議を次のようにまとめて紹介している。

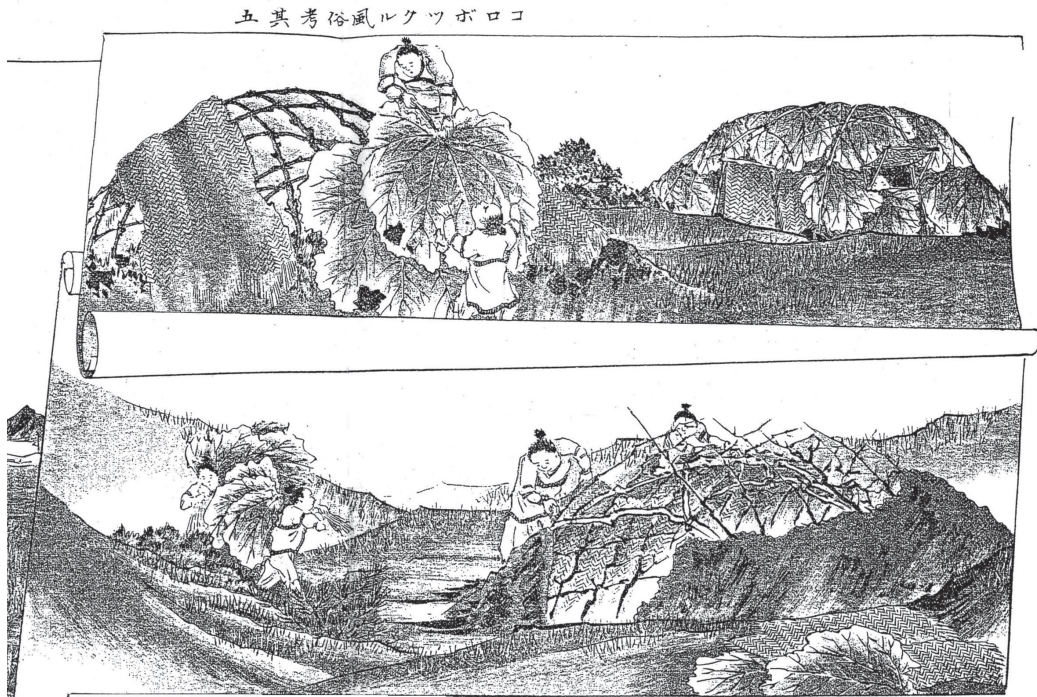
北海道における石器時代の人民についての坪井正五郎博士、小金井博士、鳥居龍藏博士の三説を記しておく。

坪井博士はコロボツクルであるとしてゐる。その理由として博士は、貝塚人種の人骨がアイヌ人と著しく相違してゐること、貝塚人種五ヶの下あごの内で二ヶは各一本づゝのそ齒があつたが、アイヌにはそれのあることは極めてまれであること、土偶の研究により貝塚人種の風俗がアイヌと著しく違つてゐること、貝塚人種は好んで貝食をしたけれどもアイヌはこれを好まない事、貝塚人種はたて穴に住まうたけれどもアイヌはこれにすまない事、貝塚人種の遺跡から多數の石器を発見されるけれど、アイヌは早くから優等人種と交通したために古代において用いられたアイヌ使用の石器が多く残されてゐるとは考へられないこと、貝塚人種は土器を用いたけれども

アイヌは鉄器を得ない前は木にて製作したので土器の必要を感じなかつたはずである事、アイヌ族の間にはコロボツクルなる先住民があつたとの言ひ伝えがある事の八点をあげてゐる。（コロボツクルの口伝については後に記す事にする）

小金井博士は、坪井博士のコロボツクル説を否定して北海道の石器時代の住民はやはりアイヌであつたと主張してゐるが、その理由として、坪井博士の人骨の調査はなほ不充分であつて、實際はアイヌと近似してゐるのである。五ヶの内二ヶのそ齒を発見したといふ事はむしろ珍しい例であつて、確證とする事は出来ないものである。風俗に相違があるといふ事は時の觀念を失つ考察であつて、歲月とともに變化するは当然の事である。貝類の遺跡に富むは未開時代の人民に最も容易に供給し得た結果であつて、漁労の方法の発達した後には之を食する量の減ずる事は当然の事であつて近世のアイヌが貝類を好まない事によつて、石器時代の人種と相違してゐるといふ事は出来ない事である。ロシア人の古い記録にアイヌが竪穴に住つてゐた事が記されてあり、カバフトアイヌ及び色丹アイヌは今なお竪穴に住つてゐるのである。北千島（絹撫「原文ママ・得撫か」より東北の諸島）のアイヌには石器土器を使用した口碑がある。等の數項の反證をあげて、一部のアイヌが現に竪穴に住つてゐる事は、アイヌと石器時代との關係をつないである事であり、アイヌは獸獵魚漁をもつて生業とする民族であつて金属を鍛冶する技術はかつて知らなかつた事は石器時代の境遇から進歩しなかつた證拠であつて、北海道における石器時代の民族はアイヌであつたと推断するに何の無理もない事であるといつてゐる。鳥居氏は、北千島アイヌが竪穴に住ひして石器土器を使用した事は明らかであるが北海道本土のアイヌは之を使用したといふ確證がないといふ点を論拠として、

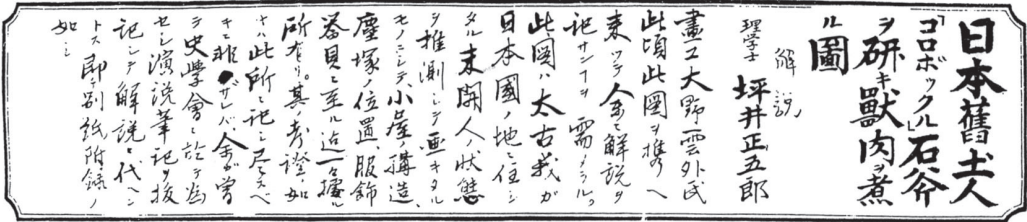
図版 1



『風俗画報』97号（明治28年8月） 蔭の葉で覆った住居



『風俗画報』108号（明治29年2月） コロボックル（座っている女性）とアイヌ



「日本旧土人コロボツクル石斧ヲ研ギ獸肉ヲ煮タル図」石版 明治36 (1903) 年製  
大野雲外 (延太郎 東京帝国大学類学教室図工) 筆 東京大学総合研究博物館蔵

北海道における石器時代の住民は千島アイヌであると主張してゐる。

中田千畝『アイヌ神話』〔報知新聞社出版部一九二四年〕6～7頁

コロボツクル論争は坪井正五郎の逝去により終息するが、北方地域の先住民についての考察はその後も、千島列島系、大陸系など様々に発展していった。昭和三十三年(一九五八)年の刊行された『網走市史』上巻の先史時代編では、河野広道による「第一節 コロボツクル説話を周るコロボツクル説とアイヌ説」で、近世から昭和二十年代までの資料や考察がまとめられ、網走市内の遺跡に見られる「オホーツク土器人」「モヨロ民族」への考察の導入となっている。

歴史学者工藤雅樹は「コロボツクルと日本考古学」(『考古学の世界』第1巻北海道・東北「ぎょうせい一九九三年」)221～222頁で、「彼のコロボツクル説は彼がまだアマチュアといつてもよい若い時代に生成され、それが一生保持されたものであって、かならずしも近代人類学の方法を踏まえた学説ではなかったといえるかも知れない」としている。

なお、この論争の経過については、『愛知学院大学教養部紀要』  
 「一九九七～一九九八年」に発表された吉岡郁夫・小出龍郎「コロボッ  
 クル説の成立と終焉Ⅰ～Ⅳ」に詳しい

#### 第四章 伝説事例

先住民としての「コロボックル」論争とは別に、「小人」としての「コ  
 ロボックル」伝説は明治以降、北海道各地で採集されている。松浦武  
 四郎が『十勝日誌』で取り上げた十勝地方では、地名の由来に結びつ  
 き、本論「はじめに」で紹介した事例②（本論97頁）の類型が多く残っ  
 ている。

宮田貢「十勝の伝説」では、

十勝川附近に移り住んだアイヌ族は至つて平和な安楽な生活に恵  
 まれてゐた、シヤンルル（十勝川）には無数の鮭が上つた、又森林  
 の薄い所には熊に襲はるゝを避ける鹿群が居た。それで衣食は充分  
 であつたのである。而しこの平和な十勝川沿岸の生活に不思議に耐  
 えられぬ事件が夜な夜な起こつた。

夕陽が西方の森林に没して寂漠とした。真夜中、アイヌ族の住居  
 を訪づれて東の窓から石の椀、又は水の椀に入れた鮭の卵等が置か  
 れるのであつた……初めはアイヌ達も恐れをなしてゐたが或一人が  
 「獵の歸り影の様な小人が大藪の下に居るのを見つけた眞實に影の  
 様で捕へることは出来なかつた」と云ふ話があつてからは確に夜  
 な夜な食物を與へる者はこそその小人に相違ないとの考へから其正體  
 を見極めることに議が決した。そしてこの正體を見極める役として  
 二人の青年が選ばれたたのである。青年達は東方の窓下に寄つて

#### (十四)

夜の更けるのを待つた。やがて十勝川の流の音のみが響き渡る眞夜  
 中となつた。青年達はじつと窓を見詰めた……其時である、洞穴の  
 暗がりの様に無気味にその窓から眞白なしなやかな手が……石椀を  
 持つた手がすると伸びて來た、青年の目は異様に輝いた。

あつ……次の瞬間、響いた悲鳴それに続いて可愛い女、小人の女  
 が引づり込まれた。石椀に盛られた鮭の卵は散乱してゐる。引づり  
 込まれた小人の女は恐しきに打伏してゐる。小人ではあるが福よか  
 な肩の圓味、波打つ眞黒髪……青年は食る様にそれを眺めてゐた。

遂ひに青年は小人女の総てを見た。特に目立つて彼等の心を引い  
 たものは鼻下の入墨であつた。（アイヌ達は椀を作ること及婦人の  
 鼻下の入墨は小人即ちコロボックル族がち習つたものと言伝えてゐ  
 る）小人女コロボックル女の悲し味と恐怖の一夜、アイヌ青年の喜  
 びの一夜は明けた。その朝コロボックル女は青年の手から離される  
 を得た。それから二三日は過ぎて或朝未だ朝霧霞む十勝川の流を一  
 つの丸木舟が下つてゐた。

舟には六捨人（六は定数に非ずして何にても多さを形容するに使  
 はれる）のコロボックル人が乗り口々に「トカツプ、トカツプ（妖  
 霊よ）（アイヌを侮蔑しての、しつた言葉 悉く死すがよい鮭の皮  
 の焼け爛れた如く死すがよい）と叫び乍ら―彼等、彼等が好意を持っ  
 て遇するに對しアイヌ族が余りにも非道なるを憤慨して此の十勝を  
 見棄てる事としたのである。だが考へれば考へる程思へば意ふ程ア  
 イヌ族の仕打ちは無道である。彼等は遂にアイヌ族を呪ひ殺せうと  
 考へたのである。「トカツプ、トカツプ（妖霊よ）（アイヌを侮蔑し  
 ての、しつた言葉 悉く死すがよい鮭の皮の焼け爛れた如く）何ん  
 たる悲しき叫び……弱者の叫びである。それより後十勝にはコロ  
 ボックル人の姿は見えなかつた。（又一時遁れたが再び引返して兩

族間に戦がありコロボツクル族は敗走したとの云傳もある) が然し「トカツプ」の言葉は何時迄もアイヌ族の脳裡を離れなかった。それで十勝川(シヤンルル)沿岸大體の地を「トカツプ」即ち「十勝」と命名したのであると。

宮田貢「十勝の伝説」『旅と伝説』二巻八号通巻二十号「三光社一九二九年一月」43〜44頁

吉田巖は話者中村要吉から次の話を採取している。

コロボクウンクル

コロボクウンクル大昔、十勝に住んでいたという。まことに小人で、昼も姿が見られなかった。腕に食物を入れて、家の隙間からそつと入れたが、姿が見えぬので不思議なものとした。アイヌが姥首合(フパイル)をとりにいくと山に姿が見えぬが、先に走りて、フパイルをとつて与えるなど、物をアイヌに恵むもので不思議がられた。或時、例の物を恵んで或家に手をさし入れたのを、アイヌが無理に家に引き入れて、裸にして見たら、女神(メノコカムイ)であった。この辱しめをひどく腹立って「アイヌ皆、長生するな」とのろひながら、何処ともなく、コロボクウンクルカムイは皆立去ってしまった。とウチャシコマにある。ツウカプチというのは秋味の皮が火に焼けることで生物の命がなくなること。これまでシヤンルルといったのをそれからはツウカプチということになったのは、コロボクウンクルの呪言によつたのであると。

吉田巖「杖のみたま」『民族学研究』十七巻三・四号「日本民族学会一九五六年三月」

工藤梅次郎は『アイヌ民話』に収録した「シベ物語」のなかで次の話を紹介している。同書は冒頭に「コロボツクルといふエスキモー人種に似寄つた小人」と、坪井正五郎の学説(正確には渡瀬莊三郎の報告)に影響された補足や、文章にも著者工藤による創作が入っている。なおこの話では「コロボツクル」の体格は、「身の丈一尺二三寸」「身の丈一尺あるかないか」とあり、村上嶋之丞の記録『蝦夷島奇観』の「體四尺はかり」からかなり縮小されているが、アイヌと対峙できる存

図版2



挿絵 捕えられたコロボツクルの女性 (工藤梅次郎『アイヌ民話』1926年)

在で書かれている。（図版2）

シペに、コロボックルといふエスキモー人種に似寄った小人が住んでゐた。

コロボックルは、身の丈一尺二三寸が普通で、昼の間は山奥に隠れて、夜になつてから、川魚を漁つてゐる夜稼ぎの人種であつた。そしてその捕つた魚をば、己れの喰ふだけを取つてアトの残りは、いつもアイヌの棲家の透間からソツト差入れてゐた。

会議が終つて、妾腹系のサピンノトクは、オツテナや一族にわかれを告げて、わが家に戻つた時は、もう日もトツブリと暮れて、何時の間にか、烈しい風もやみ星の光は射るやうに輝いてゐた。

『今戻つた』と、声をかけてわが家に入ると、妻のサンパテキは『ゆふべの川魚を料理したから、サア召し上りませ』

とすゝめた。けれどもサピンノトクはよろこびぶ気色のないばかりか、声を荒らげて

『そんなものは喰べたくない。その奇しき魚は、われ等一族を滅ぼさんとする悪鬼の化身である。今夜はそれを突きとめて八ツ裂きにしてやらねばならぬ』

と叫び、その夜は妻を早く寝させて、ひとりで待ち構えてゐた。夜は深々と更けて地の底から流れて来る冷たい風は音もなく過ぎる。

その間、瞳を睨とこらして今か今かと待つてゐると、表戸の透間から、白魚のやうな手頸があらはれて、同時に三尾の川魚がソツト妻の枕頭に置かれたので、その手頸をギュツと握つて引捕へてしまつた。星の光りで見れば身の丈一尺あるかないかの、口や手の甲に入墨をしたコロボックルの若い女であつた。

（十六）

サピンノトクに捕へられたコロボックルの若い女は、酋長の娘で小人ながら容貌よく生れついた少女であつた。己が姿をアイヌに見られたのを、口惜しがつて、小さな軀をワナワナとふるはしながら、救ひを求めた。けれどもサピンノトクはその逞しい腕に、可憐の少女を掻い込んで、オツテナの家に引き立てた。オツテナを始め一族は見馴れぬ姿に不審を抱き、何処からこんな美しいものが湧いたか、いろいろと訊ねるのであつた。少女は無念に泣くのみであつた。

一方、コロボックルの酋長は、わが可愛い娘が、アイヌのために拉し去られたことを知つてから、その悲しみは一通りではなかつた。終日、わが子を救ひ出す方法について考へたが、うまい考へも出ず、ほとんど生きた心地もしなかつたが、いよいよ同族の手を借りて深夜一拳に乗り込んで奪ひ返へさうと、数十の同族と共に獨木船を浮べて、シペコタンに辿り着いた。そしてオツテナの家を襲ふべく家中を覗くと今や荒くれ男がよつてたかつて、逃げ惑ふ少女を追ひ廻はし、無理にも狼藉を加へんとする利那であつた。コロボックルの一団はこの状を見るや、嵐の如く飛び込んで手早く荒くれ男の手から、少女を奪ひかへして、獨木船に乘せてコロボックル、コタンに逃げてしまつた。その時、言ひ残した胸に燃ゆるアイヌ呪ひの炎は『アイヌ若死せよ。早く老ひよ。髭も早く白くなれ』といふ言葉であつた。そして口々に唱へたトカブチといふ言葉は「鮭の焼け焦げるやうに」といふ意で、アイヌに恨みをはらすための呪ひの辞であつた。

それからシペコタンをトカブチといふやうになり、刀勝といふたこともあつたが今では十勝と書くやうになつた。

序にトカブチの原名、シペの意義をたづねれば、親といふ意味があつて十勝川の原名であるが、オトプケ川は男で、サチナイ川は女

で、いづれもシペの子であるとしてある。またシペの別名を、シア  
ンルといひ、親の甘い川の意で、アイヌ達がこの河水で命をつな  
いだので、斯く呼んだものどもいはれてゐる。

工藤梅次郎『アイヌ民話』〔工藤書店一九二六年〕 30〜33頁

道北地域では、次のような事例がある。

昭和三十九年、名寄市の大河上州は、五十年前に名寄に移住した父  
親が、アイヌの古老から聞いた説話をまとめており、コロボツクルに  
ついても「茨戸ヒユテカン蠅伝」として次の話を採集している。なお  
この話ではコロボツクルが去った後にシャモ（和人）が来るようにな  
りコタンが滅びたとなり、因果関係を示唆した内容になっている。

#### コロボツクン

コロボツクンとか、コロボツクルとか云うが、この話は、そこ、  
ここによつて多小異つてゐるという。天塩川筋の話であるが、昔、  
まだシャモが居らなかつた時は皆も幸福で、平和な日々が続いた。  
その頃、コロボツクンという小さを人が居て、時々いろいろな珍ら  
しいものを持つて来てくれたという。しかし誰もコロボツクンの姿  
を見たものはいなかつた。夜明け前にそつときて、戸を少し開いて、  
その隙間から手を入れて、珍らしい物を置いて行くのである。

コタンのエカシたちは、その姿をみると罰が当たると言つていたの  
であるが、或る時、若者の一人が、どうしても一度は見つてやろう  
と思ひ、夜中から戸の蔭で待ちつづけた。

夜もそろそろ明けかゝる頃、静かに足音が聞こえたかとおもうと、  
戸が少し開いて、小さな可愛らしい手に、きれいな宝物を持つて差  
し延べてきた。若者は、その手首をぐつと握んで、むりむりにひき

づりこんだ。ところがその小人は、裸でほんとうに可愛らしい人で  
あつた。

小人は自分のことをコロボツクンと称した。そうして「姿を見ら  
れたから、これからは再びコタンにはこない」と云つて草の葉の蔭  
へ逃げて行つてしまつた。

コロボツクンが来なくなつたその頃から、シャモがくるようにな  
つて、コタンはだんだん滅びていつた。コロボツクンはいつも裸で  
一家十人位が一本の蔭の葉の下で暮らしていたということである。

茨戸ヒユテカン蠅伝

註

・コロボツクン

コル kor 「蔭の葉。」

ボク pok 「下。」

クル kul 「人、影。神、痺、影。」

コロホツクル 蔭の葉の下の人。

小人伝説は各地にあつて、コロボクンクル、コロボツクカムイ、  
コロボキリ、コロボクウンクル、などいろいろ称している。蔭の葉  
かげに六〇人、とか三〇人、一〇人、八人、五〜六人というふう  
に、共通しているのは、蔭の葉かげとか下に生活したということ、姿を  
見せないで食物などを持つてきてくれたということ、姿をみられて  
から、何処かへ去つてしまつた。などということである。神曲や英  
雄説話に出てくる神々と関係づけた話もあるが、調べれば面白いと  
思う。

大河上州採録 長谷川功訳註『ナヨ口の伝説 郷土資料集第四集』〔名  
寄市立図書館一九六四年〕 8頁

北海道宗谷郡猿払村には昭和初期まで、アイヌの古老が昔話を伝えており、旧宗谷村泊内地域を中心に稚内から猿払まで広がっていた次の話が伝えられている。

コロボックルなる小人が、アイヌが来任する以前の昔、宗谷の沿岸地帯に穴を掘り、あるいは草むろを造って住み、川や海の魚を漁り住んでいたという。そしてその漁法はアイヌたちの到底及ばない敏捷さであったというが、このコロボックルアイヌに対して種々の風習をもっていた。姿を絶対に見せないこと、川や海で獲った魚をアイヌに捧げるということなのである。

姿を見せない小人たちは深夜にそとアイヌ民家の窓下や入口に魚を置いて行ったという。ところが好奇心をいだいた一人のアイヌの若者が、小人の姿を一目見ようと連夜待ち伏せ、ついに小人を掃えたのである。小人は一メートルそこそこで、顔にいれずみをし、半裸の両腕はたくましかった。この異様なこの姿を見たアイヌの若者は描えられた小人より以上に驚き腰を抜かしてしまった。しかし、このことがあってからアイヌの家には、小人からの魚は届けられなくなった。それどころか小人たちの消息は全くなかった。小人たちはアイヌの仕打ちを恐れ、持物一切を泊内のチルラトイに埋め、いずこへか逃げ去ったのである。

アイヌがいれずみをするのは、この小人コロボックルから教わったものであるという。

猿払村史編纂発行委員会『猿払村史』「猿払村役場一九七六年」 603頁

昭和三十一年（一九五六）年に、更科源蔵よってまとめられた『北海道伝説集・アイヌ篇』には、明治の考古学者大野延太郎が記録した天

塩での伝承が再掲載されている。

## 十二 コロボックル

コロボックル（路の莫の下の方）或はトイチセコロ（土家の者）という小人伝説は全道各地に同じ形で伝えられている。天塩のアヤチエという老人が伝えたという話を原文のまま記すと、

「昔コロボクグンなる小人あり、五代程前に天塩に住みたりと云、堅穴はこれが住居跡なりと云ふ。昔小人（或はコロボックルという）なるものあり、アイヌこれに接したることありと云ふ、アイヌが常に魚類が彼所にありと云ひ居れば、小人が直に聞き知りて先に行きては取れり、総て何なりとも先廻りするなり、コロボックルは雨降りて路の其の下に十人ばかりも入ることができし故に、斯く名付たりといふ。亦魚の外に食物を食べたしと云へば、何なりとも持ち来り呉れしなり、右の如く総て先廻りなして賢きものなり、なかなか多く住居せりと云ふ、又何でも入口の窓より手を入れて置いて行けり、或時小人の女が入口へ食物を持ち来れり、女は裸裎にてありしを強て引入れ見れば、泣き出して大いに恥じ夫より小人は皆諸方へ逃げ行きしと。やきものは何でも石にて捨てへ、模様を彫刻せり、小人逃れ行くときは是を破壊し行けりとぞ、行く先は離れ島なりといふ。」

原出典 大野延太郎「北海道旅行中の見聞記」『東京人類学雑誌』「二八九九年十一月」、更科源蔵編『北海道伝説集・アイヌ篇』「楡書房一九五六年」 228頁転載

## 第五章 小人伝説

近代に採集された「コロポツクル」の説話には「小人」の言葉が使われているが、路の葉の下に入れるほどの体格として捉えられ、具体的な大きさを述べたものでも「一メートルそこそこ」(前掲『猿払村史』)とある。

「コロポツクル」が空想的な「小人」へと明確に描かれたものに、昭和七(一九三二)年三月に発行された『北海道小學郷土讀本 卷一』に掲載された「コロポツクル」がある。本文は以下のとおり。

コロポツクル  
ムカレ ムカシ、ホクカイダウニ  
アイヌ ノ ラヂサン ヤ ラバサン  
タチ ガ、マダ ソンナニ  
キナイ トキ、コロポツクル ガ  
キタ ト イフコトデス。  
コロポツクル ハ タイヘン  
チヒサナ カハイラシイ ヒトタチ  
デシタ。  
フキ ノ ハ ノ シタ ガ  
オウチ デス。 アメ ガ フル ト  
ソコヘ カケコミマス。  
二十二ン モ  
三十二ン モ  
一マイ ノ ハ ノ シタ  
デ、クビ ヲ

ナガクシテ、アラゾラ ノ デル  
ノ ヲ マテマス。  
アツイ ヒ ニハ、 ハ ノ シタ  
ニ マルク ナランデ、ナカヨク  
ヒルネ ヲ シマス。  
ツキ ノ ヨイ バン ニハ、ハ  
ノ ウヘ エ アガツテ、マルク  
マルクワ ヲ ツクツテ ヲドリマス。  
チラチラ ト ユキ ガ フリダスト、  
フキ ノ ネモト ニ アナヲ  
ホツテ ハイリマス。  
クマザサ ノ ハデ フネ ヲ  
ツクリマス。  
オンコ ノ ハ  
ヲ カイ ニ シマス。  
タランボウ ノ トゲ ヲ ヤリ  
ニ シマス。  
エツサ エツサ ト カケゴエ  
ヲ カケテ、ゲンキヨク レフ  
エ デカケマス  
一ピキ ノ ニシン ヲ トル  
ト、ダイレフ ノ  
ハタ ヲ タテマス。  
一ピキ ノ ニシン  
デ 五ニン モ 六ニンモ  
ハラ ガ 一パイ ニ ナルホド デス。

ニシン ヲ トル コト ガ タイヘン

ジャウツ デ、トレル

ト、イツモ アイヌ ノ ヲバサン

ダチ ニ アゲマス

アイヌ ノ ヲヂサン ヲバサン

タチ ハ、コノ カハイラシイ

ヒト タチ カラ、イロイロナノ

コト ヲ ヲシヘラレマレタ。

ソノウチ ニ アイヌ ノ ヒト

タチ ガ フエチキタノデ

コロボックル ハ ダンダン ト

サムイ ハウ ヘ ウツツテ

イツテ シマッタ サウ デス

北海道小学校校長会編纂『北海道小學郷土讀本 卷二』〔日本教育出版社一九三二年〕 84～93頁

本文には挿絵四枚附されており、北海道特有の大鹿は描かれず、いずれも「コロボックル」の小ささが強調されている（図版3）。昭和十二（一九三七）年発行の同書『尋常一年 上巻』では、文章に変更はないが挿絵にアイヌの男性が登場し、対比されている（図版4）。

## 第六章 創作

雑誌『赤い鳥』をはじめとして、童話の創作活動が盛んになった大正期から、説話の採集から離れた「コロボックル」の文芸作品が書かれる。大正二年には坪井正五郎が逝去し、学界における「コロボックル

（二十）

ル論争」が、先住民としての否定が結論となったこの頃、「コロボックル」は説話の産物として、創作活動に利用されている。

大正十（一九二一）年一月、『赤い鳥』に小説家宇野浩二による童話作品「路の下の神様」が発表される。この作品の「コロボックンクル」は「小さい神様」「いたずらな神様」「なさけぶかい神様」であり、アイヌ民族へ物を与えるが姿は見せない存在として描いている。説話の「コロボックル」と同様に、アイヌの男性との接触が、その地を去る理由となるが、この童話では「コロボックンクル」が姿を隠す「かくれ蓑」を奪い取ることがきっかけとなる。そのシーンは次のように書かれている。

「コロボックンクルは、けつして人間にすがたを見せたことがない、という話だが、おれが、ひとつ見てやろう。なんの、神様だなんていったって、路の下にいるくらいだから、それに、この事からはんだんしても、小さい、力のよいものにちがいない。ひとつ、つかまえて、みせ物にして、金ももうけよう」

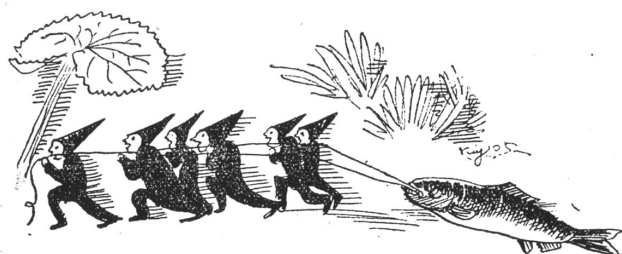
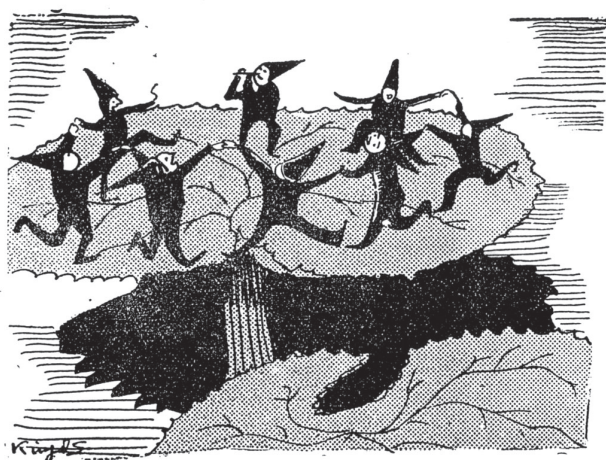
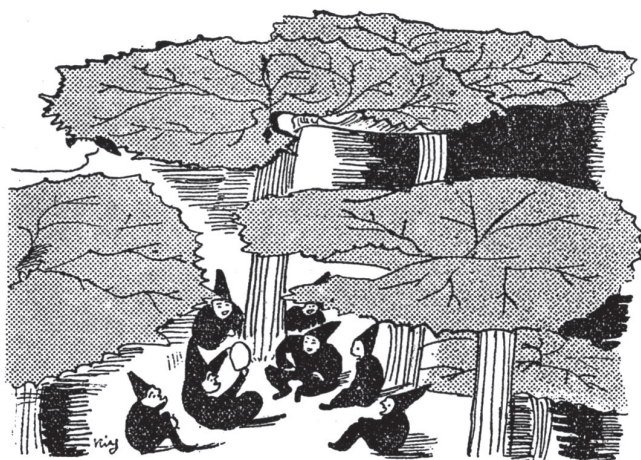
クシベシという男は、さきにもいったように、心のよくない人間でしたから、ごちそうをくれた、コロボックンクルのしんせつなどは忘れてしまつて、いきなり、ごちそうをさし出してくれた、コロボックンクルの、小さい、かわいらしい手を、ぐつとつかまえて、むりやりに、かくれ蓑を、ひきむいてしまいました。

どんなに、コロボックンクルは、びっくりしたことでしょう。また、はずかしがったことでしょう。いかに、すばしこいといったところが、こういう、らんばうな男につかまえられたのでは、どうにもしようがありません。

そこで、いろいろと、かなしそうな声で、クシベシに、かくれ蓑

図版 3

挿絵『北海道小學郷土讀本 卷一』  
(1932年)



図版4

挿絵『北海道小學郷土讀本  
尋常一年 上巻』（1937年）



をかえしてくれるように、とたのみましたが、クシベシは、ただ、いじわるそうに、にやにや笑っているばかりでした。

そこで、しまいには、コロボツクンクルは、泣きだしました。

しかし、クシベシは、へいきな顔をして、

「そんなに、かくれ蓑がかえしてほしければ、かえしてやらぬこともないが、そのかわりに、ただではだめだよ。」

「わしにできることなら、なんでも……」と、コロボツクンクルはいいました。

そこで、クシベシは、しばらく、なにか考えていました

「じゃ、おれの……」と、いいました。が、あまり、いろいろな、よくばりな、考えが、つぎからつぎと、あたまの中にわいてきますので、なかなか考えがきまりませんでした。

が、やがて、

「そうさな、おれが一生のあいだ、たべあまるだけのたべ物と、さあまるだけのき物とを、くれるとよくそくしたら……、それでがまんしてやろう」

『北海道文学全集』第五巻「立風書房一九八〇年」245頁

この童話にある「かくれ蓑」という発想は作者宇野浩二の出身地九州に伝わる彦一話などの「天狗の隠れ蓑」からきていると思われるが、道具そのものの活用はない。話はその後、一生分の食糧として六俵の米俵が届き、それが尽きたとき、「コロボツクンクル」をいじめた男は死んでしまうという、因果応報でおわっている。結語には、

そうして、コロボツクンクルがいなくなるとともに、アイヌ人は、だんだんほろびて采まして、年々に数がすくなくなり、今では、もうほとんどなくなりそうなりさまだそうです。

コロボツクンクルは、やはり、アイヌの守り神様だったのでしよう。

とある。「コロボツクンクル」が退去した後、アイヌの集落もなくなるという結末は、他の民間説話のなかにもみられるが、民族全体への影響とし、「コロボツクンクル」を「神」とする解釈にも問題はある。近現代における和人によるアイヌ民間説話をもとにした創作活動には読者に誤解を招く作品が多いが、これもその一つといえる。

この作品は昭和三年に刊行された『現代日本文学全集三十三 少年文学集』にも収録され、同じくアイヌ民族を描いた「春を告げる鳥」とともに宇野の童話作品の代表作になっている。

この他にも昭和七年十二月に『函館の小学生』一〇九号に発表された海老名礼太「コロボツクンクル物語」、昭和五十三年二月に発行された今井鴻象の絵本『コロボツクンクルはもういない』（フレーベル館）がある。

また、宮本百合子が、大正七（一九一八）年に、父の知人であったバチエラーのもとに寄宿して書いた「風に乗って来るコロボツクンクル」は、アイヌの初老の男性イレンカトムが、養子にした和人の子どもが「やくざな若者」へと変貌したために苦悩する姿を描いている。この作品では息子の帰りを待つイレンカトムの幻聴として「コロボツクンクル」が登場する。

イレンカトムが、父親から聞いた話と思い合わせて見ると、自分に掛るものは、如何してもコロボツクンクルという、小人らしい。

何故なら、その小人は種々な術を知って居て、姿を隠した声許りで、人のところへ訪ねて行ったりしたと云うことも同じだし、自分の父親の友達だった者の名や、役人の名等を覚えて、それに就いて

う処を見れば、如何しても古いときからいる者だということが分る。それに、ああやって風に乗って飛んで来るようなことは、決して体の大きな者共に出来る芸当ではない。

まして、Y岬の近所に、元コロボックルが棲んでいたという穴居の跡が在るのを知っているイレんカトムは、自分のその判断が、決して理由のないことではなく思われる。

きつと、コロボックルに違いない、とその次から注意すると、ちゃあんとその声は、自分達は背丈の短かいコロボックルだと云い始める。

彼はもう、すっかりコロボックルにきめて、山本さんにもそのことを話した。

如何も何にしろ、男や女の沢山の声が、彼方此方暴れながら、絶間なく喋るのだから煩くて堪らない。一体、私の親父の時代のコロボックルも、あんなに手に負えないものだったろうか、などと云うイレんカトムの話を聞いた人達は、始めのうち誰も本気にしなかった。

けれども、段々彼がその声を相手に大論判をしている処へ行ったりして、彼の云うことは信じられると共に、頭の調子の狂ってしまったのも認められない訳には行かぬ。部落では、イレんカトムという名の代りに、皆コロボックルの親父と云うように成った。

『北海道文学全集』第十一巻「立風書房一九八〇年」 17～18頁

その後も「コロボックル」の声は絶えずイレんカトムを悩ませ、最後には義経の軍勢が攻めて来たと告げる。イレんカトムは岬から「軍勢」を見つけ「自分達の昔の祖先の宝庫から、書物や書く物を盗み去ったばかりか、また来て何か悪業をしようというのか！ 神の戦士の六

つの弓、六つの矢にかけてただでは決して逃すまいぞ」と挑む。現実の社会で、主人公の財産を奪った和人と義経を混乱させ、また息子の幻も見ると、気付いたときには

イレんカトムは喫驚して、一体如何したのだと訊くと、如何したところではない、お前はもう少しで海に溺れる処だったのだと、通りすがりの彼等が、暴れる彼を漸々に押えつけた始末を話して聞せた。

其訳を聞いたとき、イレんカトムは、涙を流さんばかりにして、コロボックル奴に騙されたのを口惜しがった。

昔は、屈強な若者で、自分の手から逃げる獣はないとまで云われた自分が、小人風情に侮られて、惨めな態を見られなければならないことは、彼にとつていかほどの苦痛であつたか分らない。

前掲書19頁

この作品では「コロボックル」が苦悩し傷心した主人公の内なる声となっている。背景には「コロボックル」伝説も踏まえながら、その神秘性を、心情描写に活かしたといえる。

## おわりに

アイヌ民族の伝承や説話集や文芸作品で取り上げる民間説話としての「コロボックル」には、「小人」のイメージが強いが、本論で紹介した資料にみられるように、その描写は学術研究や創作活動により変化しつづけて伝えられている。

和人側の記録で、簡潔にまとめられた最上徳内『渡島筆記』（一八〇八

年)「コロブクングル」の話には、前述したように

「ふきの葉の陰に六人も七人もかくれたりといふなれば、常の人にてはさは有まじ、小人ならむとて、これをききし(に) 松前や南部、津軽より来る鄙人か臆よりいひ出したる詞なるよし。」と、「路の下」という描写から和人による「コロボツクル」＝「小人」のイメージが作られていたことが記されている。和人のこうした認識は、少彦名や一寸法師のような「小人」説話を背景にしていると思われるが、最上の記録にもあるように、この時期の「コロボツクル」には「路の下」とともに「土器、石器、穴居」の使用者という設定があり、遺物・遺構から説話的な「小人」とはならず、アイヌ民族とは別の民族とされていた。そのため村上嶋之丞のように古文獻に現れる異人種を当てはめる考察などがあつた。

明治に入ってからバチエラーやミルンによる「コロボツクル」とアイヌ民族との考察や、明治中期からの坪井正五郎の研究も、先住民としての「コロボツクル」の実存を認め、人種としての位置づけに注目している点では、村上嶋之丞の研究を継いでいるといえる。

しかし、坪井正五郎の研究は白井光太郎、小金井良精ら考古学、人類学における論争のなかで多くの学者から否定され、大正二年の坪井の死により反論がなくなったことで、先住民としての「コロボツクル」像が排除された。藤本英夫が『北海道大百科事典』で「坪井のコロボツクル説はブレ・アイヌ説につながる」と述べているように人種としての考察は現在も意義を持っているが、明治の論争では「土器、石器、穴居の使用者」の観点に注目されていた。そのため「コロボツクル」実存の否定は、最上徳内『渡島筆記』からあつた「コロボツクル」の設定のひとつを失わせ、「路の下」のみが残された。考古学、人類学上から実存が認められなくなった「コロボツクル」は、「路の下」と

いう設定と、アイヌの民間説話に多くあるという伝承状況から、しだいに空想的な存在へと変化していく。

それまで「土器、石器、穴居」を使用していたことや、民間説話のなかでもアイヌと対峙していることから、「路の下」に入る小柄なイメージに止まっていたが、実存を否定された後の「コロボツクル」には、「小人」として描かれるようになる。

『北海道小學郷土讀本 卷二』(昭和七年)には西洋的な小人像で描かれ、「ツキノヨイバンニハ、ハノウヘエアガツテ、マルクマルクワヲツクツテヨドリマス」など、本来の民間説話にもない表現が加えられ、小人の童話としての作品化がされている。創作作品としては、宮本百合子「風に乗って来るコロボツクル」のような、伝説を背景とした心理描写は別として、宇野浩二「路の下の神様」のように童話作品や絵本に登場している。これは民間説話という前提と、「小人」のイメージから、作品化の容易なキャラクターとなっているためであろう。

今後の筆者の課題は、日本近現代史の中におけるコロボツクル伝説とその論争の評価をすることである。

なお引用文献は本文中に明示したので一覧表は省略した。

## 謝辞

国際日本文化研究センター・北海道道立図書館・北海道開拓記念館・北星学園大学図書館に資料提供・検索においてお世話になりました。また、本論作成にあたり鈴木仁氏の協力がありません。ここに感謝申し上げます。